

幼稚園教諭・保育士養成課程における、 ピアノ未経験者の技術習得過程についての一考察

吉 岡 三 貴*

要 約

幼稚園教諭・保育士養成課程におけるピアノ未経験者を対象に、ピアノその他楽器を通じて自己を表現しようとする姿勢の変容を明らかにし、授業内容及び今後の課題を検討することを目的とし、授業アンケート、音楽会への取り組みへの学生の記述及び見取りから、検証を行う。その際に、彼らが表現を楽しむ実感を伴った音楽体験どのように積んでいくのかという「学び手」の視点、いかにして子供の可能性を引き出す豊かな表現者になっていくのかという「幼児教育携わるもの」としての視点を要点とした。人前で発表する機会の少なかった未経験者は、音楽会という一つの目標により、練習過程での身体の変化、人前で演奏し緊張することによる身体の変化を体験した。そのことは、自身の音楽体験を、匿名で漠然とした「他人事」ではなく、具体的で実感のある「自分事」として認識するようになったといえる。それを後押しするのが、具体的に「〇〇が出来るようになった」というポジティブな体験、共感的な他者からのまなざしや演奏であった。さらに、教師自身が共感的他者として学生と関わり、彼らが安心して表現できる環境を保証し、共に学びを深めていくことが重要であろう。一方、継続的な練習を促すためにどのような手立てが考えられるのかについては今後の課題としたい。

キーワード：授業研究、幼稚園教諭・保育士養成課程、幼児教育、音楽表現、模倣、繰り返し、形と型、世界への潜入、共感、文化的実践、豊かな表現者

1. 問題の所在及び、研究の目的

筆者は現在、江戸川大学メディアコミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科において、大学1、2生を対象に「器楽表現の技術」という授業を担当している。『江戸川大学 大学案内 2020』では、「幅広い専門性 表現力の向上 実践に根ざした学び 専門性を深める」という、子どもコミュニケーション学科の4つの学びの特長が示されており、「器楽表現の技術」は2つ目の特長「表現力の向上」に特に関係していると考えられる。以下に同大学案内の「表現力の向上」の部分の説明箇所を引用する。

「豊かな表現力は、他者との関係を深めると同時に、自分らしさを発揮する助けとなるものです。また保育者として子どもたちが持つ可能性を引き出す「実践力」としても欠かせません。…(中略)…また書くこと・話すことに加えて、さまざまな授業で保育に関連する実技(歌う・演奏する・演じる・つくる)に取り組み、表現力を養います。」(『江戸川大学 大学案内 2020』P.82)

続いて「たくさんの表現技術を体験して学ぶ 学外活動で地域・仲間との連携を学ぶ 保育・教育現場での実戦から学ぶ」という3点が写真と共に挙げられている。やはり同授業の関係する「たくさんの表現技術を体験して学ぶ」の部分を以下に引用する。

2019年11月30日受付

* 江戸川大学 子どもコミュニケーション学科非常勤講師
音楽学

「自由に表現する楽しさとおもしろさ。実感が、子どもたちに伝わっていく。

歌ったり、楽器をひいたり、絵を描いたり、工作したり。多彩な表現方法を楽しみながら、保育者としての役割や、指導方法を学びましょう。

ピアノの演奏スキルは幼稚園・保育園での指導に欠かせないもののひとつですが、先輩たちの中にも、ピアノ未経験者がたくさんいます。大切なのは、楽しみながら練習を続けること。「器楽表現の技術」では初歩からでもしっかりスキルアップできます。また豊かな音楽表現技術を身につけるため、紙コップなどを使った手づくりの楽器も組み合わせ、一緒に音を奏でる楽しさを伝える指導方法を学びます。…(中略)…さまざまな表現方法を知り、その技術を身につけながら、子どもとの適切な関わり方や指導方法を学びます。」(同 p.85)

以上の引用箇所から注目したいのは「豊かな表現力」が「他者との関係を深める」こと、そして「自分らしさを発揮する助けにもなる」という点である。さらに、その「豊かな表現力」が「保育者として子どもたちが持つ可能性を引き出す「実践力」としても欠かせない」のである。「豊かな表現力」の一つとして「ピアノの演奏スキル」は「指導に欠かせないもの」ではあるが、「自由に表現する楽しさとおもしろさ」を「実感」することが、子どもに「音を奏でる楽しさ」を「伝える」ことになり、大切なのは「楽しみながら練習を続けること」にはかならない。つまり、学生自身がまずは「楽しむ」こと、そして、表現することを通して他者と関係を深め、自分らしさを発揮するという経験を経て、子どもたちの可能性を引き出すことができるのだ。「表現することは楽しい」という実感を伴った音楽体験が彼らにとって大切だということである。

しかし、ピアノ未経験者の学生の姿からは、自信がなく、自己表現をすることへの怖れを持っていることがみてとれる。その背景には、猶原も指

摘しているように、低い自己肯定感や表現やコミュニケーション力の不安(猶原 2019)、或いは他人から評価されることへの恐怖心もあるようだ。大学生活もはじまったばかりの4月には、毎時間「自分はクラスの中で1番楽譜が読めないのではないかと尋ねてきたり、「(ピアノが)出来なくても見捨てないでください」と訴えてくる者もいた。又、自分だけでは何をしたいのか分からず、教師からの声かけがないと練習を始められない学生も多い。外に向けて何かを発表した、というような体験も少なく、練習をすればできるようになる、というイメージを掴めないようだ。「どうせ出来ない」「でも、分からない」が口癖の学生も少なくない。

尚、入学時のアンケートをみると、ピアノのレッスンを受けた経験が「ある」と答えた学生は25%、「少しある」が35%、「全くない」は40%であった(アンケート未提出の学生もいたため、実際には、それぞれ20%、約36%、約43%であった)。入学時には半数近くの学生がピアノのレッスンを受けたことが未経験者の状態である。これは、大学案内でも「初歩からでもしっかりスキルアップ」と記載しているように、ピアノ未経験者も受け入れるということが本大学の特徴のひとつであることにも起因しているだろう(入学試験にはピアノの実技は無い)。

そこで本稿では、1年生の約半数を占めるピアノ未経験者を対象に、ピアノの技術習得過程及び、ピアノその他楽器を通じて自己を表現しようとする姿勢の変容を明らかにし、授業内容及び今後の課題を検討することを目的とする。尚、10月に行われる学内音楽会を一つの区切りとして検証したい。幼児教育に携わる事を目指す彼らがいかにして、音楽を楽しみ、他者との関係を深め、自分らしさを発揮し、子どもの可能性を引き出す「豊かな表現者」になっていくのかという視点に主眼を置きたい。

2. 研究の方法

初回時の授業と、前期の最後の授業時に実施し

たアンケート調査より、学生自身の記述の変容を捉える。さらに、後期の10月に行われた音楽会へ取り組む姿からの見取りや、感想からの考察も加える。

3. 授業の概要及び構成

「器楽表現の技術」は、1, 2年生が必修の授業として、通年で授業を受けることになっている。10月下旬には1, 2年生合同で行われる学科内の音楽会に参加することが、実技の大きな発表の場となっている。また、授業内で前期後期、最低1回は、クラス内で保育園や幼稚園でよく歌われる歌（以下、子どもの歌とする）の弾き歌いを発表すること（発表者の伴奏に合わせて、残りの者が皆で歌う）、チェック表（3-2-4に詳述する）により各学生の習熟度をチェックするという具体的な課題として行っている。クラスは、ピアノのレッスン経験に応じて3つに別れており、2019年度は最多で22名、最少で16名である。基本的には一斉授業で、必要に応じて個別の指導を行う。音楽には、1人1台分の電子ピアノがコの字型2列～3列で配置されている。

尚、学生は、自分の必要に応じ、授業時以外にもインストラクターによる個人レッスンを無料で受けることが可能である。

3-1. 授業の目的、目標、実施スケジュール (シラバスより)

1年生が対象の「器楽表現の技術 A」では「保育の現場に役立つピアノ等の演奏技術を身につける」ことを副題に掲げ、「保育・教育の現場で楽しく自信を持って音楽表現ができるよう、基本的な器楽演奏能力（ピアノ等）を身に付ける。読譜・演奏についての基本を理解すると同時に、実際にピアノ・その他の楽器演奏を通して身体を使って表現することになっていく」という授業概要を記載している。「器楽の基本用語や基本概念を知る」「初学者においては、楽譜を自分で読み、ピアノ等で演奏できる能力を身につける」「幼児を対象に、楽しく音楽活動を展開させられる基本

的な器楽演奏能力（ピアノ等）を獲得する」という3点が到達目標である。

実施スケジュールは以下の通りである。

- 第1回 ガイダンス：実際にピアノ触れてみよう
- 第2回 わらべうたあそび、手遊び、指あそび：音を探ってピアノでも弾いてみる
- 第3回 リズムあそび：簡単なリズムアンサンブル
- 第4回 楽器あそび：乳児期の楽器と幼児期の楽器
- 第5回 音の重なり：オスティナート、ドローンであそぶ
- 第6回 スケールとカデンツ（1）長音階と三和音
- 第7回 スケールとカデンツ（2）主要三和音
- 第8回 季節のうた：ト音記号を読んでみる
- 第9回 様々なうたと伴奏
- 第10回 アンサンブル（1）トーンチャイム、ハンドベルを中心に
- 第11回 アンサンブル（2）打楽器を中心に
- 第12回 アンサンブル（3）楽器を選んで合わせてみる
- 第13回 発表（1）発表会へ向けて課題の検討
- 第14回 発表（2）発表会とふりかえり

（作成：吉岡）

シラバス作成の関係上、便宜的に内容を14回に分けて記しているが、実際には、各回の内容を組み合わせて繰り返ししながら、重層的に授業を進めている。各項目は1回の授業で身に付くものでは到底なく、何度も繰り返しながら身体に馴染ませ、学びを深めていくものだと考えるからである。では、実際の授業はどの様に行われているのかを、その意図も含めながら次項で示したい。

3-2. 実際の授業構成

毎時間の授業のおおまかな流れ、内容、目的は、以下の通りである。

1. 手遊び・わらべうた遊び、リズムあそび

(約10～15分間)

2. 指の体操及び、スケールとカデンツ（ハ長調、ト長調、ヘ長調）（約10～20分間）
3. 子どもの歌の弾き歌い（約20～30分間）
4. 日常の曲の弾き歌い（約10分間）
※チェック表の曲
5. 各自練習の時間（約20～30分間）

3-2-1. 手遊び・わらべうた遊び、リズム遊び

1では、身体をほぐすことを目的とし、毎週1～2つのわらべうた及び手遊びを紹介している。遊ぶ際におおよその対象年齢を示し、対象年齢に偏りが無いように行っている。又、前の週に紹介したものを翌週の最初に復習する為、毎時2～4つの遊びを行うこととなる。電子ピアノの多数ある音楽室での活動となるため、実施できる遊びには制限があるが、歌うことを大事に行っている。形だけを真似している学生も、周りに上手に遊べる学生がいると、次第に身体が言葉に乗ってくる様子も見られる。

また、「リズムに苦手意識がある」という声が学生より毎年挙げられる為、今年度より、リズム遊びも新たに行うようにしている。教師のリズムを真似することから始まり、学生1人ずつのリズム応答（誰かが作ったリズムを他の全員で真似する）、リズムカノンへと発展させている。それぞれ、4分音符4つ分を基本の単位とし、2分・4分・8分・16分音符、付点4分・付点8分音符、2分・4分・8分休符のリズムを使用している。1人ずつのリズム応答では、4拍のリズムを作ること、前の人から間を空けずに打つことをルールとしているが、特に正解や不正解は無い。

手遊び・わらべうた遊びとも共通して言えるのは、他者から批評・評価されることなく、まずは安心して声や音を出す環境を心がけていることだ。自分の作ったリズムをクラスの皆が真似して打つこと、或いは遊びの中で自分の発言により皆が動くこと（例：おちたおちた）で、僅かな時間ではあるが自分の表現を他者の前に表す事、お互

いに聴き合う事、自分の表現を受け入れてもらえたという自己肯定感を積み重ねていく事を意図している。楽器は使わなくとも、打った際に各人の手から出る音色や創るリズムは、それぞれの学生によって異なり、学生からはその事に驚きと楽しさを感じる姿も見られた。

3-2-2. 指の体操及び、スケールとカデンツ （ハ長調、ト長調、ヘ長調）

2では、1で行った身体ほぐしから、今度は指をほぐし、ピアノを弾く姿勢へと向かう。音楽室には学生1人につき1台電子ピアノがある。コの字型に配置されており、お互いの顔が見えるようになっている。スケールとカデンツでは、いわゆる子供の歌によく使用されるハ長調、ト長調、ヘ長調を、全員で一斉に1オクターヴ弾く。ただし、3和音同時に鳴らすことは、ピアノ未経験者においては困難を生じる者もいる。その為、前期のうちはカデンツの真ん中の音を省いてもよい、と伝えている。カデンツの3種の和音（I度、IV度、V度）を左手で弾けると、子供の歌の伴奏の多くが弾ける事を伝え、諦めないように伝えている。尚、一斉に弾いた際に出来ていなかった学生は、その都度個別に指導する。尚、スケール、カデンツも後述する「チェック表」（3-2-4に詳述）のチェック項目となっており、ABクラスでは、ハ長調、ト長調、Cクラスではヘ長調までのチェックを受ける事が、単位取得の条件である。

3-2-3. 子どもの歌の弾き歌い

3では、子どもの歌の楽譜を毎週3～4曲配布。クラスによって、それぞれ、難易度の違う2、3種類の伴奏譜を用意しており、各人の習熟度に合わせて学生が自分で楽譜を選択している。最初に教師の伴奏に合わせて全員で歌う。その後、曲に合わせて、ハンドベル、トーンチャイム、マリンバ、ビブラフォン、オルフ木琴、マラカス、タンバリン、ギロ、ボンゴ、等の楽器を使用し、簡単なアンサンブルも行うこともある。オスティナートやドローンについてもその際に説明する。ピアノだけではなく、扱いが比較的易しい楽器を組み

合わせて簡単なアンサンブルに親しむねらいもある。ピアノ演奏に関しては学生には、簡単でも良いので両手で演奏するということが、必ず歌いながら演奏できるようにすることを呼びかけている。特に、左手を動かすことに苦戦する学生が多い為、未経験者には、コードを押さえることができれば簡単に左手の伴奏をすることができる、と伝えている。例えば、クラスを半数に分け、左手のコード奏とその他の楽器による演奏を交代行ったり、教師がピアノではない楽器でメロディーを演奏して学生がコード奏を演奏したり、学生が曲の1フレーズをコード奏と歌で演奏するのを1人ずつ確認して回ったり、と形を変えて何度もコード奏を練習する時間を作っている。経験者には、コード奏もしつつ、難しい伴奏にも挑戦するように促している。

3-2-4. 日常の曲の弾き歌い（チェック表）

4では、保育園で日常の生活で歌われる事の多い曲を選曲し、教師のピアノ伴奏に合わせて毎週全員で歌っている。1年生では《朝のうた》《あなたのおなまえは》《せんせいとお友だち》《おててをあらいましょう》《おべんとう》《はをみがきましょう》《おはようのうた》《おかたづけ》《おかえりのうた》の9曲、2年生では《おやつ》《さよならのうた～おかえりマーチ》を加えた11曲である。毎週繰り返す事で、歌を身体に馴染ませ、定着させる狙いがある。ピアノ伴奏も弾けるようになった者は、自分の弾ける曲、弾ける部分を一緒に伴奏している。その際も必ず歌いながら演奏するように声がけをしている。

尚、上記の9曲の弾き歌いを出来る様になる事を、単位取得の条件としている。学生には「チェック表」を配布し、両手で伴奏しながら歌が歌えたら、授業担当の教師又はインストラクターに聞かせ、サインを貰うという流れになっている。日常の曲以外の歌を出来る様になった者は、自分で曲名を記入し、チェックを受けることが可能である。特に、ピアノ経験者には、日常の曲に留まらず、多くの曲を弾き歌い出来る様になるよう、呼びかけている。

3-2-5. 各自練習の時間

5は、自分に必要な曲や、やってみたい曲、やってみたい楽器を自分で選択し、練習する時間である。チェック表を進めたい者は進め、保育園の曲とは関わりなく演奏してみたい曲や楽器がある者は、その練習をする。曲のジャンルは問わない。J-pop, 洋楽, クラシック, 映画, ディズニー, ジブリで使用される曲等、学生の選択する曲は様々である。未経験者と経験者が混在しているBクラスでは、学生同士が互いに教え合う姿もみられる。

音楽室の隣の「レッスン室」という個室に移動して、他者の音を気にせず練習することも可能である。Cクラスは、ABクラスに比べ、2～4にかける時間が比較的少なく、後述するアンケートからも各自で演奏したい曲を持っている学生が比較的多い為、各自練習の時間を多くとるようにしている。

4. クラス構成及び、 初回アンケートより【表1】

授業では入学時アンケートを元に、習熟度別に未経験者から順にABCの3クラスに分けている。今年度はAクラスが22名、Bが22名、Cクラスが16名である（ただし、部活動や楽器数の都合上、Bクラスには未経験者からピアノレッスンを受けたことがある者まで混在している）。特に未経験者は、ピアノが出来ない＝音楽が出来ないと思いついて入っている者もいる為、初回授業時にはまずは知っている手遊び・わらべうた遊びを1人ずつ尋ねた。そして皆で遊べるわらべうた遊びを行う（《おせんべやけたかな》、《くまさんくまさん》）。よく遊び歌った後、次にその遊びの歌をピアノで弾いてみる。鍵盤のドの音の位置を覚えるように伝え、そこから歌った声を頼りに鍵盤で音を探っていく。教師はその間に歌い、時にはハンドサインを入れて手がかりを示す（《おせんべやけたかな》は2音、《くまさんくまさん》は3音で弾ける）。右手が出来たら左手も同様に音を出してみる。次に、鍵盤からは一旦離れ、トーン

表1 初回感想

※ A = 22名, B = 22名, C = 16名

感想の分類	感想	A	B	C
不安・心配・難しい	ピアノが全く出来ないので不安	3	3	
	クラスへの不安			6
	両手になると難しい	6	2	3
	へ音記号読めない	2		
	楽譜が読めない	5		1
	歌が下手	1		
	弾き歌いが不安			1
	音を合わせるのが難しい	1		
	指を動かすのが難しい	1		
楽しかった	わらべうた手遊びが楽しい、懐かしい	4	8	5
	弾いてみて楽しかった	6	2	2
	授業が楽しかった	3		1
	トーンチャイムが楽しい		8	1
	マリンバが楽しい			2
	皆で演奏できて楽しい			1
楽しみ	子供たちとしていくことが楽しみ	2	2	
	具体的な音楽会の曲目等			3
やりたいこと	ピアノを弾けるようになりたい	4	4	1
	色々な曲を弾けるようになりたい	1	4	2
	他の楽器もやってみたい	1	4	2
	授業以外にも練習する	6	5	3
安心した	ゆっくりで安心した、ついていけそう	2	4	1
	一人で弾かないので安心	1		
その他	歌が好き	1		
	特撮好き	1		
	ギターやベースを演奏していた	1		
	バイエルをやってほしい			1

(作成：吉岡)

チャイムを出し、4～6人毎に音のリレーを行う。前の人の音が消えるまで良く聴くように伝える。皆で一斉にピアノを弾いていた騒がしい状況から、今度は耳を澄ますことが大切だ。未経験者クラスはこの辺りで1回目の授業が終わる。

初回授業終了時には、特に質問事項は立てず

に、授業の感想を書かせた。

Aクラスではピアノの技術的なことで不安を抱えている。漠然と「ピアノが出来ない」ことへの不安や、「両手になると（指が）動かない」「楽譜が読めない、へ音記号が読めない」ことへの不安を書いた学生が、既習者・上級者に比べて圧倒

的に多く9割近くを占めた。一方で、「弾いてみたら案外楽しかった」という記述は他のクラスよりも多い。「歌をうたうことは好き」、「ピアノを弾けるようになりたい」「練習をしたい」という前向きな気持ちを綴る学生もいた。いずれにせよ、ピアノに関しては「出来ない」「弾けるようになりたい」という漠然とした記述が多く見られた。

Bクラスになると、不安の要素よりも、「トーンチャイムの音が綺麗」「ピアノをもっと弾けるようになりたい」「ピアノ以外の楽器を使うのも楽しみ」「色々な曲を弾いてみたい」というこれからやってみようという意欲を挙げる学生が多かった。「思っていたよりもゆっくり進んだので安心した、ついていけそう」と書く学生も比較的いたことから、授業内容と自身の技術とがマッチしていると感じたことにより、前向きな記述が多くみられたのかもしれない。

Cクラスは、「1番出来るクラス」に配属されたことへの不安を書く学生が多かった。一方で、わらべうた等身体を使った表現に新鮮さを感じたようだ。「身体を動かすと自然と皆笑顔になれた」という感想を書いた学生もいた。又、初心者、既習者、上級者ともにわらべうた・手遊びには懐かしさを伴い楽しく感じたようだ。「皆でくまさんを踊ったのが思ったよりも楽しくて盛り上がった」という感想もある。「(具体的な曲名を挙げて)弾いてみたい」「連弾をしてみたい」と具体的な目標を書く学生もいた。

どのクラスも共通して、「わらべうた・手遊びが懐かしい、楽しい」という感想が見られたが、Cクラスの中には、「身体を動かすと自然と皆笑顔になれた」ことや「皆でする楽しさ」を感じた者もいた。

5. 前期終了時のアンケートより

前期終了時には、ミニ音楽会と称し、いつも授業を行っている音楽室において、それぞれのクラス内での発表を行った。その上で、①楽しかったこと、出来るようになったこと ②難しかったこと、出来るようになりたいこと ③音楽会に向けて ④リズム遊び、手遊び・わらべうた遊びについて という4項目を示し、アンケートを書かせた。表2は、アンケート結果を質問別に分け、記述内容によって分類したものである。

と、出来るようになりたいこと ③音楽会に向けて ④リズム遊び、手遊び・わらべうた遊びについて という4項目を示し、アンケートを書かせた。表2は、アンケート結果を質問別に分け、記述内容によって分類したものである。

5-1. 楽しかったこと、出来るようになったこと

未経験者の回答で特に多かったのは、「弾けると楽しい、嬉しい」ということである。両手で弾けるようになってきたことや「指が動く様になってきた」ことを喜ぶ声や、「練習すればできるようになる」ということに気付いた学生もいた。弾けた喜びから家でも練習を行い、家族に褒められたことを喜ぶ回答も得られた。又、ピアノに加えてやってみたかった楽器を行えることで練習する意欲が湧いた、との記述もある。個人の経験に基づく具体的な記述が多いのも特徴である。

(以下、アンケートからの引用)

- ・曲が弾けると自分も楽しくなりピアノが好きになりました。
- ・前期の時点で両手で弾けるとは思ってもみなかったのが良かった。
- ・本当にピアノが弾けなかった私が、左手と右手で弾ける様になれて嬉しかったです。まだ簡単なのしかできないけど、それでも曲に聞こえるから「私は曲を弾いているんだ!!」って実感できて楽しいです。
- ・練習すれば私でも弾けるんだと思いました。
- ・ピアノは難しい！けど練習すれば弾けるようになる！
- ・子供に対しての曲は凄く難しいイメージがあったけど、頑張ればできそうだった。
- ・左手はCFGができれば大体は大丈夫と安心して安心しました。
- ・楽しくて家でキーボードを練習しているとママにすごいね！と言われます！うれしいです。
- ・とくにピアノとドラムにふれることができ…(中略)…練習する意欲がわきて、自分から自主室に行くことがふえました。

表2 前期感想

※ A = 22名, B = 22名, C = 16名

質問	感想の分類	感想	A	B	C
①楽しかったこと、出来るようになったこと	ピアノを弾くことについて	弾けると楽しい、嬉しい	7	5	1
		弾けると自信につながる	1		
		好きな曲が弾けて嬉しい、楽しい	2		
		弾ける曲が増えた	2		
		ピアノが好きになった		1	
		初めのピアノがとても面白かった	1		
		上達してすごく嬉しい		1	
	ピアノを弾く技術的なことについて	両手で弾けるようになってきた	6		2
		左手が動く様になって嬉しい		2	1
		指が動く様になってきた	2		
		指の運動が大事	1		
		カデンツを弾ける様になった	1	2	
		楽譜を読めるようになってきた	3	1	
		鍵盤の位置を覚えた	1	1	
	弾き歌いについて	弾き歌いができるようになってきた	1	1	3
		ゆっくりなら弾き歌いができるようになった		2	
		弾き歌いができるようになり嬉しい	1		1
		自然と1番を歌えるようになっていた			1
	チェック表	チェック表の曲をすすめられた	2	3	1
	練習について	授業以外でも練習を行った	4		4
		youtubeで調べながら頑張った	1		
		練習すればできる様になる	1	2	
		家の人にもきいてもらった	1	1	
		インストラクターレッスンで技量が上がった		1	
		インストラクターレッスンを受けた		2	
		保育園で使うので、練習しようと思える			1
	伴奏について	本伴奏を弾くように頑張った			1
		簡単な曲から難しい曲まで練習できた			1
		左手はコードで大体は弾けると知って安心した	2		2
	子どもの歌について	子どもの歌で打楽器等の楽器をみんなで鳴らしたのが楽しかった。			2
		子どもの歌が懐かしい		1	
		子どもの歌をたくさん覚えた			6
皆で簡単な曲を弾いて歌うのが楽しい			1		
授業の進行について	ゆっくりでついていきやすかった		1		
	案外難しくなく、安心した	1			
その他	趣味のギターも演奏できてよかった		1		
	ドラム挑戦したのが楽しかった	2			
	初めて連弾に挑戦できた		1	1	
	初めての楽器を見たり演奏できて楽しい	1		1	
	(授業全般を) 楽しみながらできた			1	

② 難しかったこと、出来るようになったこと	やってみたい曲について	難しい曲を弾きたい	3		2
		たくさん曲を弾ける様になりたい	2	4	1
		色々な曲に挑戦したい		2	
		好きな曲も演奏できるようになりたい		2	
		(好きな曲だけでなく) やるべき曲も練習したい		1	
		(配布された曲は) 全部弾ける様にしたい		1	
		クラシックの難曲にも挑戦したい			1
	ピアノを弾く技術的なことについて	両手が難しい	3	2	
		左右のリズムを合わせるのが難しい	1		
		小指と薬指が音が出にくい		1	
		音の名前をふらずに弾ける様になりたい	1		
		楽譜を読める様になりたい		2	
		へ音記号も読めるようになりたい			1
		指番号にも気を付けたい	2	3	
		手元を見ないで弾ける様になりたい		1	
		テンポをキープするのが難しい		1	
	弾き歌いについて	歌いながらが難しい	2		3
		知らない歌を弾くのがとても難しい		1	
		歌は苦手だが、将来やるので頑張る		1	
		日常の曲等、歌詞も覚えたい			1
	チェック表	チェック表を進める	5	5	6
	練習について	積極的に練習	3	2	
		授業以外にも練習をする	7	2	6
		毎日練習する	1	1	
		毎日の積み重ねが大事であると気づいた	1		
		インストラクターレッスンを受ける	1		1
		日常の曲以外の子どもへのうたにも取り組む		1	
伴奏について	左手も楽譜通り(コード奏ではなく)に弾いてみたい	1			
	難しい伴奏(本伴奏)に挑戦したい			4	
その他	量をこなす	1			
	私語を減らす		2	1	
	集中力をあげたい		1	3	
	思ったより弾けなかった			1	
	1人で弾くのが恥ずかしいと思ったので積極的に演奏したい	1			
	音を書ける様になりたい	1			
③ 音楽会に向けて	緊張することについて	緊張したのでたくさん練習したい	3	7	3
		うまく出来なかったので練習したい	5	2	
		思っていたよりも全然できなかった		2	
		今の(緊張してできない)状態を知れてよかった		1	
		自信を持ってできるように練習したい	1	2	
		リラックスして演奏したい	1	1	1
		緊張してもいい演奏ができる様になりたい		3	2
		人前でも間違えないようにする	3		
		完璧な演奏を目指したい	3	7	1

	他者の演奏からの気付き		皆にすごい、と言ってもらえるよう頑張る	1	1	
			周りより出遅れているので頑張りたい		1	
			他のグループが工夫されていてすごい	1	1	
			他の人（グループ）の完成度が高かった	4		4
			楽器によって出される音が違うことに気づいた	1		
	自身の演奏の工夫について		強弱を付けて演奏したい	1		
			綺麗な音を出したい		1	
			ペースが速くならないようにしたい			2
			(具体的な練習計画)		1	
			指の使い方を勉強したい		1	
他者と演奏することについて		(息の) 合った演奏をしたい	3	1	3	
		他の楽器とも合う様にしたい			2	
		人と合わせるのは大変			1	
		練習を通して団結が生まれた		2		
その他		思っていたよりうまくいった		1	1	
		恥ずかしかった			1	
		好きな曲だから頑張る		1		
		原曲を聴いて勉強したい				
④手あそび・わらべうた遊び・リズム遊びについて	リズム		リズムが案外難しい		3	2
			1人ずつリズムをつくるのが意外と難しい			2
			リズム真似がピアノにも役立った		1	
			リズム感をつけたい		1	2
			リズム遊びがピアノの時に役立った			1
			リズムに乗り、楽しかった			1
			引き続き行って欲しい			
	手遊び・わらべうたあそび	楽しい、懐かしい	手遊び・わらべうた遊びが楽しかった	2	3	6
			知らなかった遊びを知ることができて楽しい	4	5	2
			手遊びが懐かしかった	3		1
			じゃんけんの遊びが楽しい	2		
			具体的に（ひげじいさん、線路は続くよ、なべなべそこぬけ）が楽しかった			2
		自身にとって必要だと思う	手遊びは大事だと思う、将来使うと思う	5	1	1
			たくさん種類をできる様になりたい	2		
			たくさん覚えたい	1	1	4
			手遊びを忘れないようにしたい		1	
		子どもと行う事を想定	手遊びをこどもたちと出来たら楽しいだろう		1	2
			甥っ子と夏休みの間あそんでみたい		2	
	子ども（近所、親戚、バイト先）と手遊びをしたら楽しかった		1		1	
	その他		音楽に合わせて身体を動かしたらリズムの感覚がよかった	1		
			積極的に参加できた		1	
			わらべうたが地域による違いも面白い		1	
			手遊び、リズム遊び学年の人との交流の場となってよかった			1
			手遊びも子どもの成長に大きく関係している			1

(作成：吉岡)

5-2. 難しかったこと、出来るようになりたいこと

未経験者では、経験者に比べて、授業以外でも練習する、という記述が多くみられた。やはり両手が難しいということ、チェック表の曲をすすめなければ、という焦りも感じられる記述もみられた。ただ、「もっと弾けるようになりたい」「出来ないから練習したい」「頑張る」といったやや抽象的な記述が多く、①に比べると、具体的で個人的な語りを含むような記述が少ないように感じる。

(以下、アンケートからの引用)

- ・ちょっと難しいとわかんなくなっちゃうから頑張る
- ・まだ少し恥ずかしいと思って、一人で弾くのか遅くなってしまったので、後期は積極性をのばしたいと思います。
- ・やっとなんかピアノがひけるようになって、歌いながらだと指が動かなくなったりしたので、もっと練習していかないといけないな、と思いました。
- ・弾き歌いの曲がいっぱいのこっているのがんばる
- ・土日で練習しなかったら、その前日まではできていたこともできなくなっていたりと、毎日の積み重ねであると気づいた。

5-3. 音楽会に向けて

音楽会へ向けては、殆どの学生が「練習したい」という文言を記していた。特に、緊張した際の身体の変化(息が出来ない、手が震えた、等)については、生々しく迫るような記述が見られた。思ったようにできなかった悔しさについても書かれている。又、他者の発表に驚き、影響を受ける記述も見られた。他者の完成度の高さに驚くとともに、グループを組んで発表を行う学生からは、他者と息を合わせたいということや、一緒に演奏を行うことで団結が生まれたとの記述も見られた。

(以下、アンケートからの引用)

- ・弾く前は緊張しなかったけど、弾くと思ってたより全然弾けなかった。
- ・正直想像以上に失敗したし緊張しました。こんな少ない人数でも前に立ったらすごく震えたとし、息も思うように吸えなかったのでびっくりしました。
- ・全然弾けなかったけど、今の状態を知れて良かった。
- ・すげーって言われるくらい練習したい。
- ・完成度の高いグループが多かったので負けずに練習しないと！！という気持ちになりました。
- ・僕は人の心をつよくうごかせるようになりたい。パイレーツのように体がかかってにうごよような音をだしたい。
- ・他のグループを見ても団結の力が大きく反映されていると思ったので、仲も深めていきたいなと思った。
- ・他のメンバーと協力し、団結が生まれたと思う。この経験は今後にも活かせると思った。

5-4. リズム遊び、手遊び・わらべうた遊びについて

手遊び・わらべうた遊びでは、かつて遊んでいたことを思い出して懐かしんだり、久しぶりに遊んで楽しかった、という記述が多く見られた。知らないものも多かったようだが、そこへの抵抗は少なく、もっと知りたいという記述も見られる。又、将来に役立つという視点から重要性を実感する記述もあった。一方リズム遊びについての記述は少なく、又、難しいと感じた学生もいた。又、肯定的な意見も「リズム感がつくから」という目的意識に基づき、筆者が本来意図した面白さを感じる活動からは乖離していると感じた。学生にとって新規のものであったことにも由来するだろうが、まだまだ学生の身体に馴染んでいないと言えなく、これからの課題でもある。

(以下、アンケートからの引用)

- ・手遊びは小さい時にやっていたものが多く、とてもなつかしかったです。
- ・自分の知っているうたからあの時の楽しさを思い出すことができ音楽の力ってすごいなと思った。
- ・手遊びももっと知りたいと思った。知っていると実習でも使えるし、仕事になっても役立つと思いました。
- ・手遊びは将来も使うと思うので、授業で習ったやつはちゃんと出来るようになりたいと思います。
- ・幼稚園で実際にできるからちゃんと覚えたい。
- ・じゃんけん系は全部できたし楽しかった！
- ・近所の小さいこたちとやった時にさらにたのしくもっと知りたいと思いました。
- ・リズム感がすごくないので、このリズムをやってリズム感をつけたいと考えました。
- ・リズム遊びは簡単だと思っていたけれど、意外と難しくて少し苦戦しました。けど、ピアノのときに、そのリズムが役立ちました。

6. 10月の音楽会より【表3】

ここでは、音楽会への練習を通して、ピアノ未経験者を中心に、演奏が変化していく様子や、練習に熱中していく様子を記したい。

1年生が演奏した曲目については表3を参照されたい。尚、音楽会では、基本的に1組2分以内の演奏時間になるよう編曲している。(下線は筆者による)

ピアノ以外の楽器演奏がピアノの演奏も変えるケース

いつも物静かなU。授業では自ら発言することは殆どないが、熱心に練習している。ピアノは未経験者でまだ指が弱く、転がるように弾いてしまい、つかえながら演奏してしまう。音楽会を見据えた練習の際、大学に箏があることを教師が告げると、やってみたい、名乗りをあげる。高校時代に箏の部活に入っていたという。高校の頃に少しやってみたという洋楽の曲を演奏してみせる

が、ピアノと同様、つかえながら演奏してしまう。アルペジオの音も転がり、箏の音が響いていない。それらの点を教師が指摘すると、休み時間にも来て黙々と練習を続けた。それに伴い、ピアノでも一音一音をゆっくりと鳴らし、弾き直さずに演奏できるようになっていった。本番では箏の音を響かせ、同級生からは「音がすごく綺麗だった」「音色が響いてて(ママ)聴きやすくて良かった」「いつも練習していたがんばりがむくわれてよかった」「ことをはじめてきけてよかった」といった感想が寄せられた。

元々自分の親しんでいた楽器、親しんでいた曲の中で探求を進めることにより、音楽の捉え方や身体の動かし方に変化が見られ、他にも応用されていく姿がみられた。身体を通した追求が、身体を変えていく例であろう。学びの窓口は一つではない。

演奏したい曲が練習を後押しするケース

ピアノ未経験者のO。4月当初から弾いてみた曲がいくつもある様子。ある日教師に、リスト作曲の《愛の夢》を弾きたいが難しいか、と尋ねにきた。決して器用ではないOなので、今年の音楽会には間に合わないかもしれないけれど、と伝え、やや簡単に編曲された楽譜を渡した(それでも未経験者には難しい)。Oは毎日音楽室に通い、インストラクターのレッスンを受ける。こわばっていた右手の力が徐々に抜け始め、出だしの8分音符も次第に滑らかになっていった。Oの練習の様子は他の学生もみており、その成長ぶりに驚く。「クラシックひいてて(ママ)すごい」「優しい気持ちになるような音色だった」「優しさや悲しさや強さが感じられた」という感想が出た。その後Oは同じくリスト作曲の《ラ・カンパネラ》に取り組み始めた。

曲への憧れが、音楽への没頭へとつながっていったケースである。毎日練習を続けられるのはOの性格によるところが大きいのであろうが、続けることにより、身体的な変化をO自身が感じ

表3 2019年度 音楽会 1年生演奏曲目 (26組)

ジャンル	学年 クラス	曲 目	使用楽器
流行り	1-ABC	《マリーゴールド》 あいみょん	A：打楽器, B：歌, ギター, ベース, C：ドラム, キーボード
	1-AC	《R.P.G.》 SEKAI NO OWARI	A：ドラム, ギター C：キーボード
	1-AC	《スターライトパレード》 SEKAI NO OWARI	A：歌, キーボード, ギター, C：ベース, ピアノ
	1-A	《虹》 Fisher's	キーボード
	1-A	《パプリカ》 米津玄師	キーボード (2名)
	1-B	《糸》 中島みゆき	ピアノ
	1-B	《虹》 嵐	キーボード
	1-B	《One Love》 嵐	キーボード
	1-B	《プロローグ》 uru	キーボード, キーボード, ピブラフォン, マリンバ
	1-C	《way back home》 SHAUN	ピアノ
ディズニー	1-ABC	《輝く未来》 塔の上のラプンツェル	A：ハンドベル (3名), B：ホルン, キー ボード, トーンチャイム, C：トーンチャ イム
	1-BC	《彼こそが海賊》 パイレーツオブカリビアン	ピアノ連弾
	1-A	《ミッキーマウスマーチ》	マリンバ, キーボード
	1-B	《アホールニューワールド》 アラジン	キーボード, ハンドベル (4名)
	1-B	《スーパーカリフラジリスティックエキスピア リドールシャス》 メリーポピンズ	ピアノ連弾
	1-C	《Who is She》 シンデレラ	キーボード
	1-C	《パート オブ ユア ワールド》 リトルマーメイド	キーボード
	1-C	《エレクトリカルパレード》	ピアノ連弾
	1-C	《夢はひそかに》 シンデレラ	マリンバ, ピブラフォン, ピانو連弾
子供たちに 親しまれて いる曲	1-A	《WBX ~ W Boiled Extreme ~》 仮面ライ ダー W	キーボード
	1-A	《いつも何度でも》 千と千尋の神隠し	ピアノ
	1-B	《カントリーロード》 耳をすませば	ピアノ
	1-C	《虫の声》 文部省唱歌	キーボード
ジャズ等	1-A	《キラキラ星》 ジャン・フィリップ・ラモー	キーボード (2名)
	1-A	《the end of the world》 Skeeter Davis	箏
クラシック	1-B	《愛の夢》 第3番 フランツ・リスト	ピアノ
	1-C	《軍隊行進曲》 フレデリック・ショパン	ピアノ

(作成：吉岡)

られたこともあるだろう。音楽会後は「これはどうやったら弾けますか？」と教師に実演を求め、指の運びをまじまじと観察していた。身体を通して分かろうとする姿であろう。

他者の姿から影響を受けるケース

前期のうちには一曲もチェック表を進めず、表も無くしてしまうSとI。授業中も互いに「お前できてないだろ」「お前もだろ」などと言いつつ、なかなか集中して練習できない。発表会では同じクラスの男子4人でハンドベルを行ったが、教師が声がけをしないと練習をしない。一度間違えずに演奏できると「完璧だ」と練習を終わらせてしまう。本番では、うまくいかず、下を向いたまま演奏を終了。しかし、音楽会後、授業以外の日にレッスンを受けに来るようになる。「知らない人はちょっと」と言い、インストラクターのレッスンは受けないのだが、授業者である筆者のレッスンなら受けるという。そこにはいつものようにおちゃらける姿はなく、お互いに黙々と練習を続ける。なぜ来るようになったのか、と尋ねると、さすがにまずいかなと思って、とはにかなだ。

入学時から自信のなさをお互いにふざけあう事でごまかしている様子だったSとIであったが、音楽会をきっかけに少しずつ変化がみられた。授業中は他人の目が気になり集中出来ない様でもあった。又、いつも授業を受けている筆者のレッスンを受けるという条件でレッスンに来るようになる。これはS、Iに限らないのだが、「インストラクターの先生は怖くないですか？」と尋ねる学生も少なくない。新しいことに対する抵抗や恐れが見られるが、馴染みのあるものをきっかけに少しずつ活動を広げることを出来るようだ。周りの目を気にする姿から、少しずつ自分の世界へ集中する姿が見られ始めている。

尚、これらのケースに共通して言えるのは、それぞれの姿を見ている同級生・教師の存在があるということである。Uの発表には「がんばりがむ

くわれてよかった」という感想が寄せられ、Oの練習を聴いた同じクラスの学生は「O君で初心者だよね!？」と驚きの声をあげた。又、馴染みの教師の前で安心して自分の表現に集中し始めたS、Iの姿にも注目したい。

7. 考察

冒頭で筆者は、「学生自身がまずは「楽しむ」こと、そして、表現することを通して他者と関係を深め、自分らしさを発揮するという経験を経て、子どもたちの可能性を引き出すことができる」、それには「表現することは楽しい」という実感を伴った音楽体験が彼らにとって大切だということであると述べた。つまり、学生自身がいかに学ぶのか、表現を楽しむ実感を伴った音楽体験どのように積んでいくのか、という「学び手」の視点、そしていかにして子供の可能性を引き出す豊かな表現者になっていくのかという「幼児教育へ携わるもの」としての視点が筆者の授業において重要な視点である。音楽の実技という授業の特性上、「わざ」の習得過程からの生田の研究や幼児教育における佐伯の研究を参照したい。

岡田、猶原はお茶の水女子大附属小学校の「交響して学ぶ」という研究の中で「教師が子どもの課題ととらえたのは、自分の問いがもてず、すぐに「正解」を求めようとする、或いは主張はするが他者の声を受けとめられない、権威に弱いといった傾向が見られることであった」（岡田；猶原 2014：2）と述べている。これは、筆者がみている大学生にも当てはまることである。Iも述べたように、学生の中には自己肯定感が低く、自己表現をすることへの怖れを持っていることがみてとれる。そこで、小学校での実践研究からも手がかりを得たい。

7-1. 学び手として

— 実感を伴った音楽体験 —

・形と型

生田は、学校教育的「型」の習得を批判し、「形」と「型」は異なるものだと説明している。

「親や先生からみて「善い子」の条件は、「しなさい」と言われて素直にそれに従うことであり、またそれが仲間の同級生よりもできるということにつきる」(生田 2007:5)

「それは「型」と呼べるものではなく、単に表面的な「形」の習得…(中略)…これに対して、人間存在の基本としての「型」の習得というのは、そのような単なる手続きの連続の習得を超えた、現実感覚を伴う意味の理解と言ってよいであろう。」(生田 2007:3)

「現実感覚を伴う意味の理解」とは筆者の目指す実感と伴った音楽体験に通ずるであろう。又、「歌における個性と協調性」という討論の中で佐藤学は、「子どもたちは必ずある個人的な経験とともにその音との出会いも経験していて、好きな歌や曲の語りを通して自分の経験が語られる」(佐伯;他(編)1995:204-205)として音楽が抽象的なものではないと述べている。これは、前述の5-2前期終了時のアンケートにおいてみられた。特に、自分が出来る様になった喜びを語る記述、人前での緊張感を伴った発表を終えた後の記述からは、実感のこもった言葉が端々に見られた。又、手遊び・わらべうた遊びの実践からは、かつての体験を思い出し懐かしむ声も多く聞かれた。これらは、学生が授業における音楽的表現を、他人事ではなく、「自分事」として捉えられようになってきたことの表れではないだろうか。それは「(緊張してうまくいかなかったから)もっとよくなりたい」という思いや「出来た」という喜びにおいて活性化されていたことは注目すべきであろう。

又、生田は、「形」から「型」への移行プロセスの要点について次のように述べる。

「「形」から「型」への移行のプロセスにおいて要点となっている「解釈の努力」とは、理由、説明を見出すという言語的な解釈とは質を異にする、身体全体でその「形」の意味についての納得を得たい、積極的に探りたいといった、人間にとってより開かれた解釈の努力であ

る。」(生田 2007:33)

では、「形」の意味について納得を得るために必要なこととは何であろうか。

・世界への潜入

生田は「形」の意味について納得を得るためには「世界への潜入」が必要だと述べる。

「世界に自らを潜入させることによって学ぶべきものは、「文化遺産」としての「わざ」、また「歴史性」をもって「わざ」であり、決して他の世界から独立して存在する「技能」としての「わざ」ではないのである。」(生田 2007:82)

「「わざ」の習得は、「形」そのものの習得の背後にある、「世界への潜入」すなわち学習者の身体全体での価値の取り込みといった暗黙知な要素を含めて捉えなければその真の認知プロセスは明らかにされないであろう。」(生田 2007:84-85)

これは、先に述べた音楽会への取り組みにおけるOの様に、練習に没頭すること、そして他者の演奏から身体全体で理解しようとする姿はその一例といえないだろうか。生田のいう「型の習得」へのプロセスには程遠いが、その片鱗が音楽会という発表の場へ向かう練習の姿から見られるだろう。猶原も「「演奏したい」という強い思いは、彼らのわざ(技術)も高めていきます。」(猶原 2016:80)と述べている。演奏したいという動機付け、自らを「世界へ潜入」しようとする動機付けが重要になる。

7-2. 幼児教育に携わるものとして

—豊かな表現者を目指して—

・共感

同感と共感のちがいを、佐伯は次のように論じている。

「同感というのは、その人の感じていること

と自分の感じていることを同じなのだと思うことです。そこでは未知なる世界への探求も、新しい発見もありません。相手は自分と同じだという確認にすぎないのです。一方、共感的というのは、「自分にはすてきとは思えないけれどそう思いたい」、「そういうものの良さをわかりたい」と思うところから、その人が良いといっているのはどういうところなのだろうということを探求して「理解」しようとする。そこにいたる経緯やそこでの「良さ」を、心底「納得」しようとする。それが共感なのです。(佐伯 2007: 24)

これは、音楽会への取り組みの中でもみられた。Uの発表を聴いた感想には、箏を「きいたことがなかったけれど、よかった」「かっこよかった」といったことが書かれたり、又、他者の発表を聴いて「自分もあの曲を弾いてみたい」といった思いを持つ様になった学生もいた。

又、共感的他者の存在について、佐伯は以下のように述べる。

「彼らを取り巻く社会・文化的実践の場である THEY 的世界において、彼らがより自分らしく参加できるスタンスを探り構築していく過程を支えているのは共感的他者 (YOU 的他者) の存在でした。それは、決して「同じ考え・同じ価値基準を持つ他者」ではありません。そのような他者を意識せずに済んでしまう他者との間に生成される「対話」は単声的なものとなり、閉鎖的な「場」を生み出しかねません。そうした「場」においては多様な「参加」の在りようが受容されたり、それぞれの「参加」の在りようを変容させ得るような「学び」は起こりにくくなると考えられます。その「場」で生まれるかわりが、ダイアログとしての「対話」となり、新しい視点や活動の生成につながっていくためには、自分と異なる他者性を担った「他者」とのかかわりが必要なのではないでしょうか。」(佐伯 2007: 204-205)

先に、他人からの批評や評価を恐れる学生 (S と I) について述べたが、彼らに必要なものは、まさに共感的な他者との関わりではないだろうか。猶原は、子どもたちの表現の深まりについて以下のように述べる。

「他者と「同じところ」(合意)や「違うところ」(異質性)を感じたり、作品や楽器そのものと共振したりして、情動が揺れ動き、新たな活動に参加しています。このようなポジティブな体験を積み重ねる中で、子どもたちは自己肯定感を高め、仲間と相互作用しともに成長するのではないのでしょうか」(猶原 2016: 81)

「共感的であたたかい聴衆によって、子どもの表現が深まる」(猶原 2014: 86)

発表会後には、発表は終わったにも関わらず、音楽室内で自然と自分の演奏した曲を演奏したり、「あれ弾いて」と友人が発表した曲を演奏するよう頼む姿もみられた。彼らの中に自己表現の一つの「ポジティブな体験」として刻まれたのではないだろうか。学生の表現は、1, 2年生合同の音楽会という、顔の見知ったいわば「共感的な他者」のまなごしの元での自己表現や、毎時間の授業の中でのクラス内での発表の中で深まり、磨き上げられていくのではないだろうか。それは、自己の表現を深めるのみならず、相手の表現を受け入れることにもつながるだろう。

・円熟した教育者として

— 子供の営みを文化的実践としてみ直す —

佐伯は、「発達とは子どもの文化的実践である」と述べて、文化的実践について次のように論じている。

「ここで文化的実践というのは、わたしたちが文化として「大切だ」とすることを大切にすることであり、そういう大切なことを味わい、分かち合い、そしてあらたに創出することである。」(佐伯 2014: 184)

「「発達とは子どもの文化的実践である」とする

とき、気をつけねばならないことは、「文化(特定の価値や慣習で構成されたもの)」がまずあって、それを身につけることを発達とみるのではない。まず「文化的」な多くの実践があって、そういう実践に囲まれて、子どもは生まれ、育ち、そのような実践に自らも「参加」するようになるのである。」(佐伯 2014: 94-95)

又、「子どもらしさ」を「ものごと集中すること」「我をわすれて」「世界に没入すること」であると述べ、そのことを学び、自らも「子どもらしくなる」ことが「円熟する」ことであると述べる。

「子どもの営みを「文化的実践」とみなすということは、「子どもらしさ」を、未熟だとか、幼稚だというような見方をしないことである。むしろ「子どもらしさ」はわたしたちの文化として大切な特性であり、大人を含めて、あらゆる人々が「見習わなければならないこと」なのである。子どもはものごとに「夢中になる」。大人であるわたしたちは、なかなか「夢中になる」ということができない。時間をわすれ、「我をわすれて」、ただかかわっている対象の世界に没入する。こういうことが何歳になってもできる人はしあわせである。」(佐伯 2014: 185)

「保育(幼児教育)というのは、そのような「円熟」を文化として大切に、わたしたちの「生き方」として、すべての人々に「子どもらしさ」のすばらしさ、大切さを訴える文化的実践である。保育者は、まさに子どもたちの生き生きとした生き様から、じかに、「子どもらしさ」を学び、みずから「子どもらしく」なる、つまり「円熟する」ことを仕事とするのである。」(佐伯 2014: 188)

冒頭で、「どうせ出来ない」が口癖になっている学生について述べたが、彼らが不足していたのは何かに没頭するという経験ではないだろうか。夢中になって何かをする経験は「出来た出来な

い」の価値基準を凌駕する、より豊かな表現の世界へと誘うのではないだろうか。保育園や幼稚園の子供たちは出来るか出来ないかの判断の前に、自分のやりたい事をまずやってみる。自分自身が夢中になるという経験をしなければ、その様な世界を理解し、その様な子どもたちの可能性を引き出していくことは出来ないだろう。音楽会後のSとIの姿は、その世界へ少し、足を踏み入れているようにも見える。引き続き、授業の中でも夢中になる経験を仕掛けていくことが重要である。

8. まとめ及び今後の課題

人前で発表する機会の少なかった未経験者は、音楽会という一つの目標により、練習過程での身体の変化、ミニ音楽会での人前で緊張することによる身体の変化を体験した。そのことは、自身の音楽体験を、より具体的に差し迫った「自分事」として認識するようになったといえる。それを後押しするのが、具体的に「○○が出来るようになった」というポジティブな体験、共感的な他者からのまなざし(皆の前でかっこよく演奏したい)や演奏(○○さんの演奏はすごい)であった。匿名で漠然とした音楽体験ではなく、具体的で実感のある音楽体験からである。

学生の多くは保育園・幼稚園等の施設で幼児教育の従事することを目指しており、保育実習の際にピアノが弾けないと困る、ということが現実的な問題としてある。その為筆者の担当する授業では“ピアノを弾けるようにすること”が重要な課題であることには間違いない。しかし、“弾ける”という事を教師が表面的にしかとらえられなければ、生田の指摘している通り「表面的な形の習得」に留まり、そこに喜びはなく、探求する姿勢もなく、学生にとってはただの手続きになってしまうだろう。そうではなく、学生が「世界へ潜入」すること、「他人事」ではなく「自分事」として活動していくことが重要だ。

さらに重要な点は、教師である筆者自身が共感的他者として学生と関わり、彼らが安心して表現できる環境を保証し、共に学びを深めていくこと

であろう。教師自身が文化的実践者であり「豊かな表現者」でなくては、学生にそれを求める事はできない。そのような場と経験を得た学生は、子供との関わりにおいて、共感的で豊かな表現者として幼児教育の世界への探求を深めることができるのではないだろうか。

一方、前期の終わりで多くの学生が練習の必要性を記述していたが、どこか「他人事」であり、求められる回答をしている感じが否めない。確かに音楽会へ向けてはレッスン室を使用したり、インストラクターレッスンを受ける学生も増えたが、その後継続的に練習を続けることが難しい。練習経験の無さから自発的に練習の道筋を立てる事に困難を生じていることも関係しているだろうが、学生自身が表現の「世界へ潜入」し、「認識活動を活性化し、それと同時に身体の変容を促す」(生田 2007:179) ために、文化的実践へと参加する「表現者」となるために、そして「自分事」として活動できるようになるためにどのような手立てが考えられるのかについては今後の課題としたい。

参考文献

生田久美子 (2007) 『コレクション認知科学6「わざ」から知る』東京：東京大学出版。

岡田泰孝；猶原和子 (2014) 「交響して学ぶ子を育てる — 異質性が行き交うシティズンシップ教育 —」 お茶の水女子大学附属小学校；NPO 法人お茶の水児童教育研究会 (編) 『交響して学ぶ — 学習分野と創造活動でつくる学び —』東京：東洋館出版社：2-9。

佐伯胖 (2007) 『共感 — 育ち合う保育の中で —』東京：ミネルヴァ書房。(2014) 『幼児教育へのいざない [増補改訂版] — 円熟した保育者になるために —』東京：東京大学出版会。(2016) 『「わかる」ということの意味 [新版] 子どもと教育』東京：岩波書店。

佐伯胖；藤田英典；佐藤学 (編) (1995) 『表現者として育つ [シリーズ「学びと文化」5]』東京：東京大学出版会。

猶原和子 (2014) 「ハレの舞台で演奏者も聴衆も響きあう」 お茶の水女子大学附属小学校；NPO 法人お茶の水児童教育研究会 (編) 『交響して学ぶ — 学習分野と創造活動でつくる学び —』東京：東洋館出版社：86-89。(2016) 「自ら選び、他者とともに「音楽する」」 フレネ教育研究会 (編) 『フレネ教育ハンドブック 子どもが育つ学びのすじみち』s.l. フレネ教育研究会 78-81。(2019) 「社会情動的スキルを育成する授業の試み — 音楽表現を中心に —」日本保育学会第72回大会要旨。

参考資料

江戸川大学 (2020) 『江戸川大学 大学案内 2020』。

厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針』。

文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』。